



## 歩き始める時

覚えていますか？ わが子が歩き始めた時、その瞬間のことを。何の躊躇もなく、あっさりと歩き始める子。その一方で、いつまでもいつまでも伝い歩きを続け、やっと体を支えるものから手を離し仁王立ち、これはいよいよとカメラを構えるも期待は裏切られ、どっこいしょと座り込む我が子。2人なら2通り、3人なら3通り、それぞれに歩きだす時の姿が違います。前者のような時には嬉しさもありますが、あまりにあっさりと事をやってのけてしまわれて、ちょっと拍子抜けです。それに比べて後者の場合には大変です。あと少しなのだからと、仁王立ちの子どもの手を取って歩き出せるようにと促します。一步、二歩・・・でも、その調子と手を離れた途端、またスルスルとその場に座り込んでしまいます。まだ、当の本人にその気がないからです。同じ事を何度も何度も繰り返し、周囲をやきもきさせながら時は過ぎて行きます。そして、その時は突然やってきます。「えっ！」と周囲を驚かせながら、トコトコと、今までの姿は何だったのかと思わせるような雄姿を披露してくれます。“時は満ちた！”と言わんばかりです。

今、幼稚園ではその時を彷彿させる子ども達の姿に、出会う事が出来ます。昨日まで絶叫して「おか～さん、おうちかえる～」と泣いていた子が、それをやめるのです。自分の泣き声を振り切って、走って門を出て行く母の後ろ姿を確認して、泣くのをやめます。そして、何かを決意したかのようにくるっと向きをかえ、すたすたと歩き始めるのです。その瞬間、彼はひとりです。すぐそばに誰かが居て、何か声を掛けていたとしても。彼が、彼女が決断する時には、自分ひとりです。幼稚園中で一番小さい人たちですが、何かを決意し歩き始める背中、大人のように。息を呑むような瞬間です。親と同じ世界でいつも守られて生活してきた子どもが、自ら、つないだ手を離し、自分たちの世界へと歩き始めるのです。それは、この時期のたんぼぼ組さんに限って起こる事ではありません。年中や年長であっても、時に躊躇し、尻込みをし、この一步が踏み出せないでいる子ども達にはしばしば出会います。私たちは、歩き出そうとする我が子に、お母さんたちがするのと同じように、なんとかその一步が踏み出せるようにと、あれこれ手助けを試みます。励ましたり、手を引いてみたり、背中を押してみたり。その子の気持ちに寄り添い、共感したいと思いますが、そんなに簡単なことではありません。今日もまた同じことが繰り返されるのかと、しびれをきらし、諦めてしまいそうになることもあります。しかし、その時はある日突然訪れるのです。“時が満ちる”のです。幼い子ども達ですが、みな、その時には自分で決断し、しっかりと前を向いて歩き始めるのです。年齢ではないのです。そこには、ひとつの人格が確かに存在し、私が私である事を主張していることに気付かされます。

一人で歩き始める彼らを、私たちは尊重したいと思います。しかし、その決断を全てその子まかせにして、傍観することはできません。彼らより少し先に生まれて、人生ってもんを少しは知っている大人として、それはあまりに無責任です。この一步を踏み出すためのヒントと、この気持ちに寄り添ってくれる存在が子ども達には必要です。面倒くさがらずに、一緒に考えて、あれこれやってみましょう。そんな事をしている間に “時が満ちる”のです。その瞬間に是非、立ち会ってください。これも子どもと生活する者の、醍醐味です！